武装神姫「tw×in」

風紙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
武装神姫「ｔｗ×ｉｎ」

【Ｎコード】
Ｎ０６７６ＢＡ

【作者名】
風紙文

【あらすじ】
人と神姫、二人が対となる時、物語が始まる
（これは武装神姫の二次創作作品です）

始まり×バトル＝

日の暮れた砂漠……広いように見えるがそれはただそう見えるだけ。今立つ場所から向こうに見える水平線の位置にはたどり着けないようになっている。

ここを中心としてざっと周囲数十メートル、そこだけが移動出来る範囲。それ以上は見えない壁があっていけない、しかしここに立つ者から見ればそれでも充分に広すぎる空間だ。

オレは今、そんな場所に立っている。正確に言えば違うが、完璧不正解でもない。

例えるなら、自分の意識を移して他人の身体を扱う、そういう感じ。意識はオレのものながらオレのではない身体で荒野に立っている、ということ。

その手には青く光る小剣、身を包むのは白い鎧。胸に胸当て、腕に籠手、頭に兜、足は膝下までのブーツ。全て統一して創られた物だ。そんな状態のオレの前に、一つの人影が立っている。あちらもまたオレと同じような者、別の意識が入った一つの身体。両手にナイフを持ち、身を包むのはその身体に合わせて創られた武装の数々。

端的に言って、今からオレ達は戦う。

どちらかが倒れるまで、体力が尽きるまで、それが勝敗の決し方の。純粋な戦いだ。

今、互いを正面に見る間に一陣の風が吹いた。砂漠に砂煙が舞う。

その風が……

……止んだ。

瞬間、どちらかともなくオレ達は動き出した。

そして――――――

「ま、負けたー！」

数分後、砂漠から一転、場所は最寄りのゲームセンター。

前には今戦った相手、姿は互いに普通の私服、横には筐体……まぁ端的に言えば、さっきまでのは全て、バーチャル空間での出来事なんだ。

「しっかし、強くなり過ぎじゃない？」

今対戦した相手、幼なじみの水飼真南（みずかい まな）が訊いてきた。

「そうか？」

オレこと上木宗哉（かみき そうや）は、この対戦を真南に進められて始めた。つまりキャリアはあちらの方があるのだが、今回はオレの勝利で終わった。

「そうだよー、何で先輩のあたしより強いんだよー」

ぶーぶーと文句を言ってくる真南。その姿を見て、

「でもマスターの戦い方もどうかと思いますよ？　接近戦ばかりなのに手数少ないとか、体力持ちませんって」

筐体横の台の上に立つ、荒野で相対した人影が武装を外した状態で

ツッコミを入れた。
灰色のショートカットに赤色の瞳、真南の腰くらいの高さがある台の上に乗っているが肩の高さにも届いていない全長を持つ、一体のロボット。
「えー、でも銃器で狙うの大変じゃん？」
「そこはあたしがサポートしますから、てか実際使うのあたしなんですからマスターそこまで大変じゃないでしょ」
「それもそっかー」
「あのねぇ……」
真南との漫才じみた会話が始まった時、
「マスター！　お疲れさまです、今日も勝てましたね！」
同じく筐体の台に乗った、先ほどオレが扱っていて共に勝利を納めた相棒が嬉しそうに笑いながら声をかけてきた。
「うん、エンルのおかげさ」
「ふふっ、ありがとうございます、マスター」

第三次世界対戦も宇宙人の襲来もなかった現代からつながった当たり前の未来。この世界ではロボットが日常的に存在し、様々な世界、分野で活躍していた。
その名称は、神姫。
全長１５センチのフィギュアロボで、心と感情を持ちもっとも人々の近くに存在する、マスターを補佐するパートナー。
そんな一人に一人の割合で居る神姫に、人々は思い思いの武器・装甲を装着させて戦わせた。
名誉のために、強さの証明のために、あるいはただ勝利のために。
その神姫を、武装神姫と呼んだ。
それから数年後の今、バーチャル技術の革新によって人は擬似的に神姫と一体となり、意のままにコントロール出来るようになった。

これを、神姫ライドシステムと呼ぶ。
その神姫ライドシステムを使いマスターと神姫が一心一体となって他のマスターと仮想空間でのバトルを楽しむエンターテイメント。
それが、神姫バトル。今まさにやっていたものだ。
「ですが、マスターの指示があっての勝利ですから、マスターのおかげですよ」
そして彼女がオレの神姫、腰まで届く長い黄色の髪に緑色の瞳。アーンヴァルＭｋ．２型のエンルだ。
エンルはアーンヴァルＭｋ．２型の特徴と言える性格設定、丁寧な物腰と言葉使いでいつもマスターへの心配りを第一に考えているので、今もさっきの勝利は俺の成果だと言ってくれている。
「そっか、ありがとな」
「はい！」
「でもホントに宗哉、飲み込み早いよね」
「うちのマスターもそれくらい……つか、せめて銃器を積極的に使ってくれたらな……」
「ちょっとミズナー、それは言わない約束でしょー」
真南の神姫、ゼルノグラード型のミズナは大げさに肩をすくめた。
いや、大げさじゃないかもしれない。
ゼルノグラード型は元々、『戦場の記憶』プログラムというものが入っており、武器の扱いに長ける、バトル向きの神姫と言える。
中でも特に銃器に長け、ゼルノグラード型と言えば銃器重視のイメージも少しある。
だが、真南のミズナには銃器武装が無い。同時に持てる武装３つ全てが近接武器で、必然的にインファイタータイプにされている。
だからこちらは逆に銃器を２つに小剣というバランスで遠くから狙い撃ち、近づかれたら小剣で応戦しつつ距離を取れば……勝てた。
オレの腕というよりは、真南の戦い方のおかげだな。
「でも真南も銃器は使った方が良いぞ。な、エンル」
「そうですね、ミズナさんはゼルノグラード型ですので、やはり銃

器が似合うと思います」
「ぶー、宗哉やエンルちゃんまでー」
真南はふてくされて頬を膨らませる。
「ここまで言われたんですから、素直に使いましょうよ、マスター」
「持って無くはないよな？　前に使ってるの見たことあるし」
「はい、ただここ暫くは使ってませんけどね」
「でも仕方ないかー、帰って掘り出そう、ミズナも手伝ってね」
「はいはい」
掘り出そうって……どれだけ奥に閉まったんだ。
「という訳だからあたし帰ろうと思うけど、宗哉はどうする？」
「そうだな……」
まぁバトルもしたし、家で帰りを待つ……
「あの、すみません」
声をかけられた。
そこには年上に見える男性がいた。ここで声をかけるということは、
「良かったら、バトルしませんか？」
やはり、バトルの誘いか。
「あー、あたしはちょっとパスで、宗哉は？」
まぁ断わる理由は無いけど、
「エンル、どうする？」
やはりパートナーの意見を聞かないとな。
「はい、マスターがよろしければ私は頑張ります！」
「だそうなので、オレで良ければ」
「ありがとう、早速始めようか」
オレ達は筐体を挟んで正面に立った。ちなみに真南は横で観戦するようだ。
「さぁ行こうか」
相手の男性が自らのパートナーの神姫に声をかける。
「了解です。マスター」
それは真南のミズナと同じゼルノグラード型、こちらは紫色の髪に

青い瞳だ。
「よし、こっちも行くよ、エンル」
「はい、マスター！」
オレは筐体に近づいた。

Ｒｉｄｅ　ｏｎ！

今回のステージは先ほどと同じ砂漠。オレはエンルの視点で空間内を見つつ動作確認、膝を曲げたり腕を振ったりして誤作動しないか確かめる。
「行きましょうマスター、ミズナさんと同じゼルノグラード型なら戦いやすいかもしれませんね」
エンルの声を聞き、オレは返す。
声は出してるはずだけど身体は無いから、きっと一体化してるエンルにしか聞こえないだろう。
『いや、どうだろうね』
「え、そうですか？」
『多分、真南みたいな武装じゃないと思うし』
まさかのクロスレンジ固めは無いだろう。
「お待たせしました。始めましょう」
相手の神姫が正面に現れた。ゴーグル付きのメットを被っていて、その表情は見えない。
その手には、案の定ハンドガンが握られている。この時点ですでにクロスレンジ固めではなくなった。
「行きましょうマスター、勝ちましょうね！」
『そうだね、やるからには勝ちに行こう』

その時、開始のカウントダウンが開始された。

Ｒｅａｄｙ……ＧＯ！

瞬間、相手のゼルノグラードは銃口をこちらに向けて引き金を引いた。

『回避だ！』

「はい！」

素早く左にダッシュ、数秒前居たところを銃弾が通過する。

『接近戦で行こう』

「了解です！」

小剣を構え、相手に向かってダッシュを開始。そこへハンドガンが向けられた。

『弾切れが近い筈だ、当たる覚悟で攻めるよ』

引き金が引かれて銃弾が迫る。左右にステップしながら前に走って更に距離を詰める、数発を掠めて小剣の範囲内に入った時、相手のハンドガンの弾が切れた。

「いきます！」

エンルが小剣で突く、しかし相手はバク転して距離を取りつつ回避、弾切れしたハンドガンを閉まって新たな銃器を取り出した。

あれは……ライフルか。

引き金が引かれる。

『右へターンだ！』

指示に従いエンルが右へ側転、ライフルの弾丸を掠めた程度で済んだ。

ライフルはハンドガンより速度と威力があるが、弾数と連続射ちが出来ない。今は射った直後の硬直状態、攻めるなら今だ。

バク転で開かれた間合いをダッシュで詰め、再び小剣を振るう。今度はヒットし、そのまま４連コンボを当てて相手をダウンさせた。

「良い調子ですね、マスター」

『あぁ、でも油断しないように』
相手が起き上がる。下手に遠距離戦をすれば、銃器を2つ持つあちらに分があるだろう。ここはやはり、さっきと同じように近接で攻めるか。
銃器に注意しつつ接近すると、相手は新たな武装を呼び出した。
ハンドガンでもライフルでもない、3つ目の銃器、その銃口が前に走るエンルに向けられて――――
『マズイ……ガードだ！』
ガトリングが、火を吹いた。

ガガガガガガガガガガ！！

カカカカカカカカカカカン！！

とっさにシールドでガード、だがガトリング弾がみるみる内に削り、シールドの色が緑から黄、限界寸前の赤に変わる。
『くっ……堪えて、くれ……』
「うぅ……もう少し、持って……」
ガトリングの弾切れかシールドの限界、先に向かえた方がおそらく負ける。

そして、

パリーンッ！
「きゃあ！」
それらは同時に訪れた。
シールドが破壊された時、相手のガトリングの弾が尽きた。
『大丈夫か？！』

「は、はい！」
エンルは体勢を立て直す。相手はガトリングを終い、ライフルを構えている。
『ジャンプで回避！』
引き金が引かれ、ライフルの弾丸が飛ぶ、それを確認後にエンルは上へとジャンプし、弾丸を避けた。
『ロックオン』
空中で銃器を構える、相手もライフルの銃口を向けるが、
『発射！』
「当たって！」
こちらはランチャー。ライフルよりも弾数と連続射ちが出来ないが、その分威力がある。
引き金を引き、青白い光線が相手に一直線へ向かう、一瞬早かったこちらの光線が相手に直撃した。
『今の内だ、決めるぞ！』
「はい！」
そこからは高速の必殺技。神姫にインプットされたレールを通っての高速移動からの攻撃。
その名前は、
『レールアクション！　ＡＴＫ：小剣』
唱えると同時にエンルが発動のポーズを取る、その瞬間青い光が現れて軌道を作った。
「行きます！」
その軌道に乗り、エンルが高速で移動をする。右手に小剣を握り、相手の右側面へ移動、高速で移動した事により防御も回避も間に合わなかった相手を、一突。

ガシュン！

「うわぁ！」

その一撃が決着をつけた。

始まり×バトル＝（後書き）

第一話終了です。原作の大まかな言葉を入れておいたので、知らない方も楽しんでいただけたら幸いです。
次は少ししたら投稿する予定ですので、お待ちのほどを。

それでは、

2人目×1人目＝

「やりましたねマスター！　すばらしい勝利でした！」
「エンルのおかげだよ」
「ふふっ、ありがとうございますマスター。ですが…」
さっきもこんな会話したな、と思いながらオレ達は真南と別れて家に帰ってきた。
「ただいま」
と言っても、両親共に働いていて今は家を出てるから、言葉が返ってくることは…
「おかえりなさい、マスター！」
…まぁ、あるんだよね。
家から返ってきた声の主が走って玄関へやって来た。
黒い髪に橙の瞳、その人間離れした瞳の色でだいたい分かってると思うけど、彼女も神姫だ。
「ただいま、ルミア」
ハウリン型のルミア、彼女もまた、オレの神姫である。
携帯電話を一人で一台以上持つ人がいるように、一人に一人の割合で持っている神姫を、一人以上同時に持つ人もいる。オレもそんな一人だ。
だがライド出来るのは一人ずつという決まりなので、ゲームセンターには基本一人だけ連れていき、後は留守番してもらっている。たまには複数人でも行くけど。
「次はわたしを連れて行って下さいね、マスター！」
「うん、分かったよ」
靴を脱ぎ家の中へ入ると、ルミアは肩の上に乗ってきた。
ルミアはオレにとって2人目の神姫、もちろんバトルの経験もあり、実力はエンルと同じか、それ以上だと思う。
「ルミアさん、ただいま帰りました」

「おかえりなさい、エンルさん」
そしてエンルはオレにとって……3人目の神姫だ。
まぁ何が言いたいのかと言えば……
「おっ、お帰りなさい、マスター」
リビングに入ったところでテーブルの上にいた彼女に声をかけられた。
赤いロングヘアーに濃い青の瞳。真紅のボディが特徴的なアーク型の神姫で、名前は、
「ただいま、スレイニ」
「今日も勝ったんですか？」
「うん、真南に一回と、ゼルノグラード型に一回ね」
「そうですか、良かったですねマスター」
スレイニはオレにとって1人目、つまり最初の神姫だ。その頃はまだバトルに興味は無かったけど、真南からの誘いとそれを受けろと言ったスレイニにより神姫バトルを始めることにした。
当初はライドの感覚に慣れるのに苦労して、スレイニには何回も負けを味合わせてしまった。だが、今では慣れたもの。小さな大会に出場して優勝した事もある。
スレイニとバトルの腕を磨き、それからにルミアと出会い、そしてまた時が過ぎて、エンルと出会って、今日に至るという訳だ。
「スレイニさん、ただいま帰りました」
「お帰りエンルちゃん。さぁ、こっちにおいで」
スレイニはテーブルの上でエンルを手招きして呼ぶ。
「？　はい」
呼ばれた通りにエンルがテーブルに向かうと、ガッ！　と腕を捕まれた。
「え！　ど、どうしたんですか？！」
あー、この流れは。
「どうしたって、いつものクリーニングに決まってるじゃない」
「あ……あの、今日はそこまで汚れてはいないと思いますけど、な

るべく気をつけて動いてましたし…」
「ダメよ！」
「ひいっ！」
スレイニの一喝にエンルは短い悲鳴を上げる。
「今日は大丈夫だと思うその気持ちが故障の原因に繋がる事だってあるんだから！　帰って来たら毎回クリーニングしなくちゃ！」
「そ、それは確かにそうですけど、す、スレイニさんのは少々過保護過ぎ…」
「さぁそうと決まったら行くよ！　マスターも、ちゃんと手洗いとうがいしてくださいね！」
「はいはい」
「ま、マスターーー！　助けてくださーーーい！」
助けを呼ぶ声も虚しく、エンルはスレイニに引きずられて行ってしまった。
ゴメンよ、エンル。でもスレイニの言うことも正しいんだ。
ただ少し、過度なクリーニングではあるとはオレも思うけど。
「あぁ……エンルさん、大変ですね」
「明日は多分、ルミアの番だけどね」
「えぇ！？　あ、でもそうか、マスターと一緒に外へ出ればバトルの後帰ってきて今みたいな状況に……」
「今の内に覚悟しとくといいかもね」
「うぅ……それはそれで悲しいですよ……」
とりあえず、オレも手を洗って来よう。

「ま、マスタぁー……」
手を洗ってからしばらくルミアと話していると、エンルがクリーニングを終えてスレイニと共に戻って来た。元々白いボディが更に真っ白く見えるほどきれいに、言い方を変えれば新品並みにピッカピ

カだ。本人の表情はとても疲れてるけど。
「きれいになったね」
「はいぃ……」
「さぁエンルちゃん、後はバッテリーの充電よ」
「え、ですが、まだ半分も残ってますけど……」
「まだ半分、じゃないの、もう半分、よ、常に半分以上はキープしないといつ何があるか分からないんだから」
「は、はい、分かりました」
言われたエンルは机の上に置いてあるクレイドル――――神姫のバッテリー充電器兼ベッド――――の中へ。
「それではマスター、少し失礼しますね」
「うん、ゆっくり休んで」
「はい」
エンルは目を閉じ、スリープモードへなって充電を開始した。
呼べばすぐに起きるけど、今は休ませてあげよう。
「マスター、明日はどこに行きますか♪」
ルミアが話を続けてきた。
「そうだね……真南がまた誘いに来るかもしれないけど、ちょっとショップにも行きたいから、神姫センター辺りかな」
「ショップですか？」
スレイニも会話に参加する。
「何か新しい武装でも買うんですか？」
「うん、ほら、エンルはまだリアパーツが無いから」
「あー、そうでしたね」
神姫の武装には武器パーツと防具パーツがあり、その中でまた幾つかに別れている。
防具はヘッド、ボディ、アーム、スカート、レッグ、シューズ、シールド、そしてリアパーツ、背中につけて防御と共に神姫の飛行や滑空を助けるブースターのようなパーツだ。
神姫にはそれぞれ神姫を作った会社が自社の神姫に合わせたカラー

リングや形状で作った防具が売られているけど、神姫ポイント――神姫バトルをする度に貰える特別な通貨、パーツはそれで買える――が足りずに、しばらくはスレイニとルミアのパーツか、神姫共通型のパーツをつけていた。
それでバトルを続けて、ポイントが貯まる度に一つずつエンルの、アーンヴァルＭｋ．２型のパーツを買い、ついにリアパーツを残すだけとなったんだ。
ただ、そのリアパーツが高いんだ、多分防具の種類の中で一、二番に。でもその分性能が上がるから、値段に見合ってはいるんだけど。
「もう買えるんですか？」
「いや、後一戦くらい分は必要なんだ」
「リアより先に武器を揃えるからですよ、確かに武器の方が安かったですけど、防具が揃うまではアタシのを使ってれば良いのに、マスターってば」
「あはは……」
相変わらず手厳しい、正論だけどね。
「でしたら！」
ルミアがぴょんぴょんと跳び跳ねて主張し、止まって胸をぽん、と叩いた。
「わたしが明日のバトルでその分を稼ぎますよ！」
「まぁ一回でもバトルすればいいならそうなるね」
「そうだね、明日はよろしく、ルミア」
「もちろんです！」
「バトルか……そういえばしばらくやってませんね」
スレイニが呟いた。
そういえば最近はエンルの武装の為にバトルしてるから、エンルが主で、たまにルミアにお願いされて連れて行ったくらい。スレイニとはしばらくバトルをしていなかった。
「じゃあ、明日はスレイニが一緒に行く？」
「え……？　あ、その」

聞こえていたとは思わなかったのか、答えが返ってきて目を丸くした。
「い、いいですよマスター、気にしなくても、明日はもうルミアちゃんと行くって決めたんですから」
「けどさ、スレイニもバトルしたいでしょ？」
「そ、それは……まぁ……ここのところご無沙汰でしたし……て、そ、そうではなくてですね」
「あ、だったらマスター、全員で行けばいいじゃないですか！」
ルミアが提案とばかりに主張した。
「ちょっ、ルミアはそれで良いの？」
「もちろんです！　みんなでお出かけは楽しいですよ絶対！」
「それはそうかもだけど……」
「大丈夫だよスレイニ、神姫センターなら神姫を何人も連れてる人は珍しくないし、別に一回しかバトルする訳じゃないんだからさ」
「……仕方ないですね。なら、明日は皆で行きましょうか」
「わーい！」
両手を挙げて喜ぶルミア。
「もちろん、帰ってきたらクリーニングだけどね」
「ひぃ！」
キラリ、と光らせたスレイニの瞳を見てルミアは手を挙げたまま固まってしまった。
「……でも、明日が楽しみだな」
そのスレイニの呟きは、また聞こえてないようで、ちゃんと聞こえていた。

2人目×1人目＝（後書き）

これは、武装神姫の中で、ゲーム「武装神姫ＢＡＴＴＬＥ　ＭＡＳＴＥＲＳｍｋ．２」をメインに作っている物語です。知っている方は分かると思いますが、バトル方法はライドバトル、一人で神姫を何人も持っている所などです。
メインとなるのは今回出た３人の神姫、エンル、ルミア、スレイニとそのマスターである主人公、上木宗哉。彼らとその周囲の人物達との、日常を書いたもので、特に事件が起こったりはしません。多分、おそらく……きっと……うん。
まぁとにかく、次はまた少ししたら投稿します。お待ちのほどを。

それでは、

学校×友達＝

神姫を学校に持って来てはいけない。
そういう校則の為、学校で神姫を見ることは全く無い……ことは無い。皆わりと隠して持って来てるんだ。
もちろん見つかれば没収だけど、先生の目を盗んで逃げた神姫がマスターの所へ戻るから意味が無い。先生も最早諦めムードだ。
かといって、全員が全員持って来ている訳ではなく、オレは3人共留守番させている。クラス内で神姫を持って来ている割合は、半々くらいだろうか。
「おっはー、宗哉」
そこへ真南が席の前にやって来て、
「ねぇねぇ、今日はどこにバトルしに行く？」
まだ朝でＨＲも始まってないのに、学校が終わってからの事を持ち出して来た。
「マスター、気が早すぎますよ」
真南の肩に乗ったミズナがすかさずツッコんだ。
「でもどうせ話すんだしさー」
「そりゃそうですけど、やれやれ……」
諦めた風にミズナは肩をすくめる。
「でさ、どうする？」
「オレは神姫センターに行こうと思ってるけど」
「え？　ショップ目当てとか？」
「うん、エンルのリアパーツを」
「そっかぁ、じゃあわたしも行こっかな」
その時、
「おーす、何話してんだ2人共」
一人の男子生徒がオレ達の所へやって来た。
「あー東太、やっほー」

火渡東太（ひわたり あすた）、オレ達の幼なじみ、腐れ縁と呼んだ方がいいくらいの付き合いだ。
「今日学校終わったら神姫センターに行くんだよ」
「へー、じゃあ俺も行こうかな」
「お～、じゃあ東太も一緒に…」
「ダメですわよマスター」
真南の声を遮った声は、東太の肩から聞こえてきた。
丸い髪飾りに縦ロールに結われた白髪に緑色の瞳、イーダ型の神姫だ。
「本日はマスターのお姉様とのご予定が先に入っております。神姫センターに行かれるのでしたらそれを片付けてからにして下さいませ」
「うぇ、そうだった、姉貴の手伝いあったんだ……でも面倒くせぇからな……」
「何をおっしゃっていますのマスター？」
イーダ型神姫が東太の肩から机の上に飛び降り、東太をびしっ、と指さした。
「先に決めていた予定を、面倒ということだけでサボろうするなんて、何様のおつもりかしら？」
「う……」
相変わらず厳しいな、東太の神姫、カレンは。
「わ、分かった分かった、姉貴の手伝い終わってから行くから、それで良いだろ？」
「そう簡単に終わると思いませんけどね」
「だよなー……」
「まぁがんばれ、東太」
「おぅ……応援サンキューな」
多分、東太は間に合わないだろうな、と、今は思っていた。

神姫センター。ゲームセンターの様に神姫バトルの筐体があるだけではなく、神姫本体から武装パーツまで取り扱うショップ、小さな大会が開けるスペース等、神姫と神姫マスターの為の建物と言うべき場所だ。
学校から一度帰ったオレは制服から着替えて、神姫3人とそれぞれの武装パーツ、少しの予備を入れた鞄を持ってやって来た。
入り口で真南と合流し、中へと入る。
「まずはショップ？」
「いや、後一回分くらいのポイントがないと足りないから、先にバトルしないといけないんだ」
「そっか、じゃあ空いてる筐体探して、あたしとやっちゃえばいいんだね」
「そうなるね」
だがセンター内の筐体では必ずバトルが行われていた。周りで見てる人や神姫も次の番を待ってるかもしれないし、探すのは大変そうだな。
「それにしても、妙に人が多い気がするな」
「マスター、アレですよ」
鞄から顔を出したスレイニが指差す方向には垂れ幕があった。そこにはこう書かれている。

『Ｆバトル予選会』

「あぁ、だからか」
Ｆバトルとは、神姫バトルの最高峰、Ｆ１からＦ３までの３大会があり、Ｆ１の優勝者は実質最強の証を得たも当然だとか。それを求

めて神姫とマスターが集い戦う大会だ。
ただ、Ｆバトルに出るにはああした予選に幾つも勝利し、本選出場戦に勝った限られたマスターしかいけない、中々の難関だ。
「Ｆバトルかー、またやるんだね」
「もう一年くらい前だっけ、真南が出たの」
「うん、Ｆ２までは行けたんだけどね、そこでこてんぱん」
はっきり言って、真南はかなり強い。今言ったようにＦバトルのＦ２に出場経験もあるほどの腕前だ。
しかし本人の飽き性が災いして、バトルの度に武装を変更するものだから、慣れてない武装で挑んで、それこそコテンパンに負けてしまった。
つまり、真南はその気になれば強いんだ。滅多にその気にはならないけど。
「マスターがもう少しやる気になってくれてたらもっといいところまで行けたんですけどね……はぁ」
真南の肩に乗るミズナも思い出したのか、ため息をついていた。
「宗哉は出ないの？　Ｆバトル」
「うん、オレは、いいや」
特に嫌がる理由というのは無いけど、Ｆバトルは当たり前だが出場権を得た時の神姫以外は使ってはいけないというルールなので、オレはＦバトルに出ようとはどうも思わない。
「下手に出て負け恥晒すことないですからね」
スレイニも別に良いらしい。
「わたしはマスターと戦えればどこだって構いません！」
ルミアがスレイニの横に現れて宣言し、
「私は、まだまだ未熟ですから、恐れ多いですよ」
その横にエンルが現れてそう言った。
良かった、Ｆバトルに出たいというのはいないみたいで。
「さぁ、早く筐体を探そう…」
その時、

「あら、真南、それに宗哉じゃない」
前から歩いてくる人に名前を呼ばれた。よく見れば、知っている顔が2人こちらへとやって来ていた。
「あー、かなちゃん、ゆいちゃんも」
「2人も来てたのね」
「……ちは」
名前を呼んだ方は天野要（てんのかなめ）、小声で手をひらっ、と挙げた方は木部結（もくべゆい）、2人共クラスは違うが同じ学校に通う同級生だ。
「そっちこそ、珍しい組み合わせではないけど一緒に来たの？」
「えぇ、実はね、アタシ、新しい神姫を持とうと思ってるのよ」
「えー！　新しい神姫！？」
「ちょ、そんなに驚かなくてもいいじゃない。もう珍しく無いでしょ？　神姫を複数持つ人なんて、現に宗哉だって3人持ちじゃない」
「オレは、ちょっと特別な事情が入り交じってるけどね」
「とにかく、その為に必要なポイントと、どの神姫が良いか人のを見て考えてたのよ」
「ゆいちゃんも？」
「違う、ただの付き添い」
「そういう2人は？」
「宗哉のエンルちゃんのリアパーツを買いに来たの」
「ただポイントが少し足りないから、その前にバトルするんだけど」
「えぇ！　私の武装を買いに来たんですか？」
鞄から顔を出すエンルが目を丸くした。そういえば、あの時スリープモードで伝えてなかったっけ。
「そのバトルはわたしがするんですよ！」
エンルの隣でルミアは両手を振ってアピールする。
「ルミアさん、ありがとうございます」
「大丈夫だよエンルさん、わたしはバトルしたいだけだから」
「あ、じゃあちょうど良いわね」
天野が名案とばかりに指をパチンと鳴らした。

「アタシも後一回分くらい必要で結と戦う予約して来たんだけど、この４人でタッグバトルしない？　その方が勝っても負けても入るポイントが高くなるわよ」
「おー、ちょうど空いた筐体探してたところだからナイスアイデアだよ」
「結もそれで良いわよね？」
「ん、構わない」

少しして、天野達の予約の番が来て、オレ達は筐体前に集まった。筐体の台の上に、４人の神姫計６人が揃う。内３人はオレのエンル、ルミア、スレイニ。そして真南のミズナと、天野、木部の神姫だ。
「うら、やるからには勝ちに行くわよ」
「もっちろんうら、がんがん行くうらよマスター」
青い髪に赤い瞳、容姿はまるで猫のような神姫。
マオチャオ型のうら、天野の神姫だ。
「氷李、行くよ」
「仰せのままに、マスター」
水色のショートカットに緑色の瞳、容姿も含め忠誠を誓う姿も忍びのような神姫。
フブキ型の氷李、木部の神姫だ。
「組分けはどうする？」
「このままで良いんじゃない？　アタシと結。宗哉と真南で」
「じゃあけって～い、頑張ろうね、宗哉」
「うん、お互いにね」
天野と木部が筐体の向こう側へ、真南はミズナと話し始めたので、オレも３人を見る。
「ルミア、頑張ってね」
「頑張って下さい、ルミアさん」

「はい！　応援お願いしますね」
今回はルミアの番だから、スレイニとエンルは応援に回るみたいだ。
「マスター！　やるからには張り切って行きますよ！」
ルミアは両手をぶんぶんと振ってやる気をアピール。
「うん、頑張ろう」
オレは鞄から、ルミアの武装を取り出した。

Ｒｉｄｅ　ｏｎ！

犬×猫＝

今回のステージはチューブフィールド。３つの輪を組み合わせたような形をしていて、ライド開始時に相手の神姫を必ず確認出来ない、そして戦える場所はチューブの中で緩いカーブになっている、上は天井、左右は横に神姫が５人も並べば壁に手が付き、砂漠に比べて狭いのが特徴だ。

「相手はどこにいるんでしょうね」

『それは動いてみないと分からないね』

開始合図の少し前、ルミアにライドしたオレは動作確認をする為に手を握ってみた。

その手はハウリン型のアームで包まれていて、見た目がグローブを着けたようであり、コレでそのままナックルの武装になる。コレがルミアの主力武器。

このナックルと、投擲武器のチャクラム、そして同じく投擲武器の爆弾の３つがルミアの武器だ。

『そろそろ開始だ』

Ｒｅａｄｙ……ＧＯ！

――――とは言っても、相手が見えないから臨戦態勢になれないけど。

『まずは誰かを探そう、天野か木部ならバトル、真南なら一緒に行動するんだ』

「はい！」

ルミアはその場から歩き出した。緩いカーブの道を慎重に……ではなく、一気にダッシュで。

このままだと相手に出会った瞬間にブーストゲージが切れてダッシ

ュ出来なくなりそうだけど……まぁいいか。
『マスター、曲がり角ですよ』
曲がり角とはチューブが重なっている場所のこと、ここから別のチューブ、あるいは同じチューブの向こうへ移動出来る。
『隣のチューブに行ってみよう、多分誰かしらはいる筈だ』
「はい！」
ダッシュのまま隣のチューブへつながる道へ。
さて、出来れば真南のミズナと会って相手に2対1で挑めれば良いけど、逆に1対2になる可能性もあるからな。
「マスター！　誰かいました！」
ルミアの声に前を見ると、
「うら～、居たうらよ、マスター」
うらだ。どうやらあちらも一人らしい。
「うらさん！　どうしますか、マスター？」
『あっちも今は一人みたいだし、挟み撃ちに気を付けながらバトル開始だ』
「了解です！　……あ、あれ？」
その時、ルミアの動きが止まった。ダッシュのし過ぎでブーストゲージが切れたんだ。
「わぁー！　ごめんなさいマスター！　ブーストが切れちゃいました！」
慌てて謝るルミア、でもうらとのリーチを考えればそこまで困ることでもない。少しすればゲージも回復するし。
『大丈夫だよ、落ち着いて』
うらとルミアの距離は３０くらい。場所は緩いカーブの一本道。
これなら……行けるな。
『行くよルミア、レールアクションだ』
「はい！」
ルミアがレールアクションの構えを取る。
ほぼ一直線の道にこの距離。そして、予想が正しければうらにこの

レールアクションを遮る武装は無い。
『レールアクション！　ＡＴＫ：爆弾』
瞬間、ルミアは前へ跳んだ。ブーストの力ではなく、造られたレール、ただ一直線の道を駆け抜ける。
「うらっ！？　レールアクション！？」
いきなりのレールアクションに驚いたうら。
それを見たルミアは……その横を通り抜けた。
「ただの移動……じゃないうらね！」
その通り、このレールアクションは一直線に駆け抜けながら、その軌道に爆弾を仕掛けていくものだ。
駆け抜けたルミアが停止、それと同時に最初に仕掛けた爆弾から地面に着弾して爆発、半円状の爆風を残しながら次々と爆発していった。
それは当然、ルミアが止まった位置、横を通り抜けたうらの頭上にもある。自分の爆弾でルミアはダメージを受けないが、うらは違う。
「うらっ！」
うらが爆発に巻き込まれた。
これでダメージを受けてくれてれば、バトルが有利になるんだけど。
「あ、危なかったうらー」
やっぱり、緊急回避で避けられたか。まぁ予想してたけど。
レールアクションの間に、ルミアのブーストゲージは回復している。
『近づくよルミア』
「はい！」
ルミアはダッシュを開始、うらへと近づいた。
ルミアの武装は至近距離用のナックルを始めとして中近距離でしか当たらない物で固めているので、まずは相手に隣接しないと攻撃が出来ない。今みたいなレールアクションは別だけど、連続使用すればスキルポイント———神姫がレールアクション等を扱う際に使うポイント、ブーストゲージ同様に時間経過で回復する———が持たない。だから今はダッシュでうらに近づく。

「うらっ、受けて立つうらよ、ルミア！」
「行きますよ、うらさん！」
ルミアが拳を握り、前へストレートを放つ。
それを見たうらも、ルミアの拳に合わせて自らの拳を向ける。
ガッ！　互いの拳がぶつかった。
うらのアーム武装も、ルミアのそれと似た特殊なグローブ状の物。
というのもルミアのハウリン型と、うらのマオチャオ型、２人は同じ会社、ケモテックで開発された神姫だ。だから武装の種類も似たような物になっている。
ただ一つ大きな違いは、ハウリン型は、犬型。マオチャオ型は、猫型の神姫だということだけだ。
端的に言えば、これは同会社製の神姫どうしの神姫バトルになっているということ。
『ルミア、攻めるんだ！』
「はい！」
左手を握ってフックを放つと、うらも同様にフック。
ガッ！　再び拳がぶつかった。
『アタックチェイン！』
アタックチェインとは、攻撃後の硬直を無くして新たな武器で攻撃を続ける技で、スキルポイントを少し使う必要がある。
引いた右手にチャクラムが握られ、前へと３つ横向きに投げた。
「うらっ！？」
急に現れたチャクラムに驚くうらに二発命中した。
『もう一発！』
続けて第二投、しかし理解したうらに横にターンされて避けられた。
「投てきと爆弾に、ナックルうらね、分かったうら」
うらにこちらの武器が全部分かられた。かといって変更は出来ないからこのまま戦うんだけど。
それに、

『そっちはナックルとドリルと、奥の手、でしょ』
「そっちはナックルとドリル、そして奥の手だ！」
「うら！？　な、なぜ分かったうら！？」
それはまぁ……毎回同じ武装してるから。奥の手とか言ったけど、何だか分かってるし。
「うらー……奥の手を知ってるなら、出し惜しみはしないうら！」
うらがダッシュ、ルミアが奥の手の範囲内に入った瞬間、それを取り出した。
「行くうらよ！」
振り上げられたうらの奥の手、ハンマーが勢い良くルミア目掛けて降り下ろされる。
『バク転で回避！』
指示通りルミアはバク転でハンマーを回避。
「まだまだうら！」
うらはハンマーで連続して攻撃を繰り出す。ルミアは更にバク転で避け、届かない間合いまで動いた。
やっぱり厄介な武器だな、両手武器。
大剣、斧、ハンマーの三種類で、中でもハンマーは出が遅い分一撃が最も強い武器。一撃でも当たればダメージ大だ。
それに、
『チャクラムで攻撃！』
ルミアはチャクラムをうらへ投げつける。
「うらっ！」
うらはハンマーが前に構え、チャクラムの盾にして直撃を逃れた。
こうして大体の攻撃に対して働く防御、スーパーアーマー。それが一番厄介だ。
これが天野とうらのバトルスタイル、スーパーアーマーのハンマーで攻め込み、避けられればドリルとナックルにアタックチェインで繋ぐ、近接パワーファイター戦法。
こういう相手にはロングレンジで遠距離が有利だけど、あいにくル

ミアは銃器を装備してない。だから、
『接近戦で攻めるんだ！』
「了解！」
ルミアは前へダッシュ。ハンマーに気を付けながらも接近戦で戦うしかない。
「うらっ！」
うらはハンマーを終い、代わりにドリルを手に着けた。大きく振りかぶった後、前へと回転するドリルを突き出して突進を繰り出す。
『ジャンプで回避！』
ダッシュの勢いのままルミアは斜め上にジャンプ、ドリルを突くうらを飛び越えた。
空中で反転してうらの背中を捕え、そこに爆弾を放り投げる。
「いけっ！」
「うらっ！？」
爆発の衝撃がうらの背中に直撃、ダウンを奪った。
『よし、何とかダメージは与えられた』
「でもまだ油断出来ませんよ」
その通り、うらは素早く起き上がった。そこからダッシュして近づきハンマーを降り下ろしてきた。
『回避だ！』
先ほどと同様にルミアはバク転で避ける。コンボが来てもまた同じように避けるだけだ。
だが、
「甘いうら！」
うらのハンマーが消えた瞬間、手にドリルが装着されて突進。ガードが間に合わずルミアの体を貫いた。
「うわぁ！」
今のは、アタックチェインレールアクション……異なる武装で新たな攻撃をするアタックチェインで、レールアクションに繋ぐ技だ。
アタックチェインとレールアクションよりもスキルポイントを使う

が、バトル開始からどちらも使ってないうらには充分貯まっていたんだ。
「きゃう！」
レールアクションのドリルを喰らってルミアは吹き飛び、背中から床に落ちた。
『ルミア！　大丈夫か！』
バーチャル空間なので穴が空くというようなことはないけどダメージにちがいない、普通のドリルならまだしも、レールアクションの威力は強力だ。
「は、はい……まだまだいけます」
ゆっくりとルミアは立ち上がる。その行動と言葉からダメージが大きいものなのは理解出来た。
でも、ルミアが行けるというなら心配はしない。その方がルミアが喜ぶからだ。
『よし、なら攻めるよ』
「はい！」
前へとダッシュ。ブーストケージもスキルポイントもある……ここは、先のうらみたいにいくか。
ルミアは爆弾を投げ、瞬間アタックチェインでチャクラムを二回投擲する。
だがそれらはうらのハンマーのスーパーアーマーにより軽いダメージになってしまう。しかもその勢いのまま間合いを詰められ、ハンマーの範囲内に。
「っ！」
ルミアは側転でハンマーを回避、
「ムダうら！」
するとうらは再びアタックチェインレールアクションを発動した。
しかし今度はドリルではなく、ハンマーのレールアクションだった。
これは……好機！
『ルミア、なるべく引き付けるんだ！』

あえてルミアを回避に動かさず、うらのレールアクションを引き付ける。
ハンマーが頭上から降り下ろされ、ルミアに直撃……
『今だ！　前に回避！』
する直前に動き出した。ルミアは前転でハンマーの直撃を避け、うらの背後へと回った。
素早く反転すると、技後硬直でスキの出来たうらの背中にナックルを一発叩き込む。
「うらっ、でもこの距離じゃもう奥の手は避けられないうら！」
分かっている。でも、今のルミアは先のうらと似た技が使える。
そう、
『アタックチェインレールアクション！　ＡＴＫ：ナックル』
「いっけぇぇぇぇ！」
ルミアのナックルが光に包まれ、振りかぶった拳を一気に前へ。

ドガァ！

重い一撃が、うらの背中にクリーンヒット。
「うらぁぁ！」
きりもみながら床に滑り落ちたうらは、
「う……ごめん、うら、マスター……」
そう言い残して、動かなくなった。
「か……勝った、んですか？」
『うん、そうみたいだ』
「よ、良かった～……」
緊張のとけたルミアは、その場に膝を付いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0676ba/

武装神姫「tw×in」

2012年1月7日13時57分発行